

## 知事記者会見（平成24年12月17日）

### ●知事発表

#### （1）第46回衆議院議員総選挙の結果を受けて

時間：13：29～14：00

場所：プレゼン室

-----  
(幹事社)

お疲れさまです。よろしくお願ひします。

昨日、衆院選が投開票されました。この結果を受けてのですね、知事の所感を聞かせていただければと思います。

-----  
(知事)

最近の選挙では、今まで選挙というのは、総選挙何回もありましたが、前回の民主党が圧勝した選挙、その前のあの郵政解散の自民党が圧勝した選挙、今回また自民党・公明党が圧勝した選挙と、この3回の選挙はですね、いずれもやはり最近、憲政史上なかなかないパターンではないかと思ひます。

また、予想どおりといひますか、マスコミさん、皆さん方がほぼ予想した、ほとんど変わらない結果が出ておひます。

私も大体こういう感じになるのかなという、私なりの推測もありましたけれども、これほどいわれる政権党である民主党が惨敗するという、ここまでは惨敗するとは思っておひませんでした。

また、ちょうどその裏側で自民党、公明党が大変伸ばしたわけであります。いずれ国民の厳粛な審判が下ったわけであります。新しい自・公という枠組みがこの後も維持するというようでござひます。いずれ国民の大多数が、やはり現在の経済・雇用情勢、これが一番の関心事だという（調査結果が）、60%ほど出てます。そういうことでありまして、また、我々も全ての政策、福祉にしても医療にしてもですね、地域づくりにしても、どんな政策でも、やはり経済環境が低迷いたしますと、いわゆる税収だけではなくて、やはり様々な形での経済政策にかなりのウエイトが取られますので、財源的な限りがある状況でござひますので、やはり経済の立て直しという、これについては新政権でできるだけダイナミックに、そして速やかにこれを実施していただきたいと思ひます。

逆に、これが来年の参議院の選挙もござひます。そういうことで、やはりこの経済の關係に、これはどうしてもですね、マクロ経済は国しか打てませんので、このマクロ経済の關係に国が、政権が大きなウエイトを置いて政策を展開していただきますと、まあ直ちにその指数が上がるわけでござひませんけれども、一定の国民も見通せるわけであります。我々もその先がある程度見通せるわけでありますので、これが今一番我々としては望むこと

であります。

もう一つは、これはあの、根底にややありそうですけれどもですね、必ずしもそうではないかもしれませんが、やはりどうしても民主党政権になったときに、どうしても、確かに地方の方も、ものすごい民主党勝ったんですね、前回ね。地方の方、非常に勝ちましたけれども、ただその地域の振興というかね、どうしてもこの経済戦略、あるいは成長戦略も大都市にややウエイトを置いたような形に、どうも我々はそういうふうに捉えています。ですから、この現在の国際経済情勢も踏まえながらであります、是非ともやはり大都市偏重ではなくて、この農村部のような我々自然と農業を守っているこういう地方に対しても、やはり光が当たるような形での地域政策という、そういう点を、これを一定のウエイトを置いていただきたいなという、そういう思いであります。ただ、ここら辺がやはり期待が大きいわけでありますので、これはあの、いろんなマスコミでも言ってますけれども、今回はその絶対的な自民党の選択というよりも、やはり民主党の政権運営に対する国民の不満というか、その評価というものによって、やはり最も安定感のある、と思われた自民党、そして公明党のこの組み合わせに移ったわけではありますが、必ずしもその絶対的に評価してというものではないということは自民党の首脳も言っております。そういうことでありますので、是非とも与党が意見をまとめて、やはり少なくとも民主党のような党内ばらばらではなくて、一致してリーダーシップのある骨太の政策を打っていただかないと、これまた参議院（議員選挙）のときに、別の意味のしっぺ返しを食うこともあります。ですから、どちらがいいかどうかというそういう問題じゃなくて、とにかくまとまった形で秩序ある政党政治を行っていただきたいと、そういうふうに私は思っております。

この後、当然我々としても新しい政権に対しまして、それこそ県の抱える大きな問題については、何と申しますか、要望という形になるでしょうが、こういうものについて現在まとめております。いずれ予算編成は年明けになって、最終的に予算が全部出来上がるのは4月末、5月ですかね。いずれそういうことでありますので、我々としては国に対してまた新たな気持ちで様々な形の要望、意見を出していきたいと思っております。

そういう際に、これは言わずもがなですけれども、私の県政与党という立場のところは勝ったわけありますので、意思疎通は従前よりはとりやすくなっているということは確かでありますので、私どももそういう点も踏まえて県民の皆さんの意見を、やはりつなぐというの、あるいは市町村の意見、あるいは要望をつなぐというの、県の仕事でありますので、そこは抜かりのないようにきめ細かにやっていきたいと思っております。

私からは以上です。

---

(幹事社)

すいません、幹事社から数点。今回、投票率が県内約10ポイント下がって戦後最低となりました。このことへのですね、知事のご感想と、理由として考えられることを挙げていただきたいのですが。

---

(知事)

これ、もっともっと分析しないとわかりませんが、全国的にですね、やはりその何と申しますか、熱狂的な支持という形というよりは、何となく今が駄目だからもう一回

自民党に戻してみようという、ややそういう選択ですので、どうしてもその選挙がですね、非常に静かな選挙であったような感じします。それとこれ、季節柄ですね、どうしても秋田の冬の選挙でありますので、寒いしですね、選挙ムードそのものがほとんど盛り上がりなかつたというのは確かであります。やはりどうしても、そして昨日、投票日当日、また午後から非常に天候が荒れましたので、やはりですね、天気が悪いと出足が悪いというのは、どうも冬の選挙というのはそういうふうになりがちですね。

ただ、期日前投票がですね、非常に秋田は全国トップですか。これは極めてですね、秋田の場合は、私が秋田市長やっていたときにも言ったんですけども、割と期日前投票しやすいように場所の配慮だとかそういうこともやっていますので、そういう意味では期日前投票はよかったですけども、やはり全体としてですね、どこへ行ってもですね、誰に聞いても、「いやあ静かな選挙だな」と。確かに選挙カーが歩いても、みんな窓閉めていますので聞こえないですし、雪を除雪したところに、道路にこう雪の塊あるところで街頭演説もしにくいし、冬ですからそんなに人も集まってくれないということで、どうしてもですね選挙は静かな選挙と、そういうふうになったということも一つはあるんじゃないかなと思いますね。はい。

---

(幹事社)

あと1問お願いします。

今回、自民・公明合わせて320議席以上獲得してですね、参院で法案が否決されても可決できるような状況、圧倒的な勝利という形になりました。事実上、ねじれが解消したとも言える状況だと思うんですけども、このことについて知事としては期待感を持たれているのか、あるいはある種の危惧というのも一部あったりするのかな、そのあたりいかが受け止めていらっしゃるでしょうか。

---

(知事)

これはですね、自民党幹部の記者会見を聞いても、国ですね、自民党本部の。やはり3分の2条項をですね、むやみには使わないという、そういう姿勢もあるようであります。やはり自民党もですね、私は3年半の間に、大変な敗北を喫して、やはり様々な形でその便法的に強引にやるということについても一定の反省はあるんじゃないかと思います。もう一つはやはり来年の7月ですか、参議院(議員)選挙にやはりこれ各政党、そこに絞ってくるわけでありまして。ですから、やはり自民党としてはですね、少なくとも参議院の方もスムーズに通る状況を作るということを前提に、今の段階でこの3分の2条項をですね、むやみには私は使わないと思います。また、これをですね、あまりむやみに使うとまた参議院(議員選挙)に跳ね返ってくるということで、いろんな学習効果は自民党の方が十分わきまえていると思います。

---

(幹事社)

ありがとうございました。

各社さん、質問あるところお願いします。

---

(記者)

2009年、前回、民主党が歴史的な政権交代を果たして、県政とはねじれるような形になりましたけども、今回そのねじれが解消されるというようなご認識だと思うんですが、そこら辺いろんな陳情のルールだとか、民主党政権になって変わったところがあると思うんですが、そこら辺どのようにご覧になっているんでしょうか。

(知事)

自民党にもそういうきらいがない、感じもないかという、それはまあ政党ですからね、誰が政権取ってもそういう感じはあると思いますけども、私も長く行政もやりましたし、自民党政権下で市長もやりました。あの、割とフランクに様々な要望・陳情というものは、その幾つかの窓口が広がったですね。それで、あまりその、これまでの感じからしますと、たまたま私がどちらかという保守系の人間だからかもしれませんが、要望・陳情を例えば秋田市長当時持って行って、自分のところに味方することを前提にね、受け付けるなんていうことは自民党はなかったです。ただ、民主党はやはり(要望・陳情の窓口を)一本化したときに、これは、その窓口にもよりますけど、担当のね、その幹事長室の副幹事長が何人かいて、担当毎に、部門毎に受け付けるんですけども、あからさまにやはり次の選挙で民主党に応援するのが前提で、そうだったら要望を聞くという、非常に乱暴なことも言われたこともございます。私もムカッときたんですけども、少なくともそういう権力的な、割と民主党になってから非常に全てがその権力的なふうに見えたのは確かです。これはあの、それで実は私市長会のとときに抗議を申し入れたことがございます。(※)

そういうことですね、やはり少しそこら辺はですね今までとは違って、非常にその人情感のある方が多いですから、自民党はですね、ですから現場をわかっている方が多いですから、そこら辺はやりやすくなるのかなと思っています。

※「市長会のとときに」については、知事就任後に民主党政権が発足しており、言い間違いです。また、様々な形で抗議を表明しましたが、直接申し入れはしておりません。

(記者)

それから、知事個人としてですね、今回の衆院選、本県選挙区にどのような関わりをされたんでしょうか。

(知事)

2区、3区は私の後援会はあまりないんですが、1区は少なくとも私の地区後援会の8割方は富樫さんの後援会とほぼ重なったというか、重なるような状況、これはまあそういう形になりますね。そういうことで、やっぱり事実上、私は特別その組織立ってという形ではなってませんが、私の後援会の8割方はやはりいろいろな形で富樫さんと関係持ったということは事実であります。これはどうしてもみな同じですからね、メンバーが。

(記者)

知事ご自身が応援されるというような場面はあったんでしょうか。

-----  
(知 事)

私はですね、直接その外へ向かって呼びかけた、若干のプライベートな会でつぶやきはしました。しかし、選挙応援という形ではどこでも話はしてませんし、選挙会も行ったわけでもないし、個人演説会にも行ったわけではございません。これは静かに見守っていましたが、まあ見様によっては選挙事務所へ行くと私の後援会の連中が重なりますので、もう半分あそこにいたというのも事実であります。

-----  
(記 者)

あともう1点、すいません、先程のねじれの関係なんですけれども、この3年余りにわたって本県から選出された民主党の国会議員が途中で離党された方もいらっしゃいますけれども、そこら辺とのその秋田県庁との関係というのはどうだというふうに総括されますか。

-----  
(知 事)

あのですね、私は民主党だからというよりも、やはり個人個人で一生懸命それこそ親身になっているとやってくれた方もいます。ですから私はやはり知事という立場でですね、いわゆる県と国政がねじれているんで、それは知らないふりをこくというか、仕事をしないという話にはならないです。どういう状況でも、これやはり政府は政府ですから、要望することは要望して、陳情することは陳情してます。それにまた、それに応えてもらったこともあります。ただやはりですね、何となくやっぱり制約があったのは事実であります。

-----  
(記 者)

ありがとうございます。

-----  
(記 者)

先程知事の方からも若干触れられていたんですけれども、県内の三つの小選挙区で全て自民党議員が議席を取ることになったことで、秋田県内の政治に対する影響、来春の知事選、来夏の参院選もありますけれども、それを含めてどのような影響を及ぼすと考えていらっしゃいますでしょうか。

-----  
(知 事)

まああの国政の方も自民党が三人、今回ですね衆議院、そして（日本）維新（の会）が村岡君一人ということで、いわゆる保守系、旧来からの保守系という形です。県政の方も自民党が非常に多いわけでありますので、そういう意味ではですね、県政運営そのものについては、今も言ったとおり割とスムーズに行くのかなと。ただまあ知事選挙に、あるいは市町村長選挙もございませぬ。かなり、これにどういう形になるのかはですね、これはすぐストレートにはいかないのかなと。その後、ただ参議院（議員選挙）がありますからね、やはり参議院（議員）選挙を見据えた形での自民党のこれからの戦略になるでしょう

から、そういう中で自治体の首長選挙にどういうスタンスになるのかという、あるいは首長の候補者がその自民・公明にどういうスタンスになるのかということは、幾らかは違って来るかもしれません。ただ、私自身は前も、推薦ではありませんでしたけれども自民党の支持でありましたので、今までどおりの状況は変わらないと思います。

-----  
(記者)

今少し出ましたけども、3区で村岡さんが当選されて、今回、維新の会が比較的第三極としては躍進したと思われるんですが、この辺の維新の躍進というか、伸張については、どのように見ていらっしゃる(のでしょうか)。

-----  
(知事)

全体として維新がですね、まあたぶん橋下さんと石原さんは不満でしょう、あの数では。ただ、しかしですね、一首長が、大阪府知事をやった、あるいは東京都知事をやったと、これ、非常に地方からああいう形で情報発信しながら、54名ですか、まあ11人の移籍組もいますけれども、これは一つですね、新しいパターンなのかなと。ですから、やはり地方のそういう声も無視できなくなってきたということは確かじゃないかと思いません。

やっぱりですね、ただ、維新はこれから試されると思います。これからどういうスタンスで、この54名という国会議員がどういう働きをするのか、まさにこれからが正念場じゃないかと思えますね。

少なくとも私、聞かれてないことを言うんですけども、私はあの今回の民主党の敗因はですね、マニフェストもあるでしょう、いろんなことあるでしょう。私は一番なのはですね、やはり内部、党としての結束感がなくて、どちらかという対自民、対野党でなくて、中ですね、抗争が激しくて、そして民主党に逆風がある程度感じ始めたら、バラバラとですね、分解していったと、これを見て、やはり非常に私はそこら辺が一番の原因じゃないかと思えますね。自民党は大敗してもですね、移る人はほとんどいなかったですね。ですから、やはり政党という、政党そのものに対する信頼感が民主党はですね、非常に失ったということは、これが一番、私なりに考えると、これが最大の敗因ではないかと思えます。いくらその逆風あっても一致団結して乗り越えるという、やはり日本人はですね、何と申しますかそういう、例えば負けてもね、同志を捨てないと、そういう気持ちで日本人は好きなんですよ。やっぱりそういう心情を持っていますからね、何かこうあっちこっちこう、パパッと出ちゃうというのは、非常に日本人としてはですね、あまりそこは、ですからその個人というのは確かにその出た個人は当選するかもしれないけども、政党に関しての非常にですね、何と申しますか信頼度が失われるという、そこら辺でこれから維新がどうなのかということもあるのかなと思えますね。はい。

-----  
(記者)

今度、安倍総裁が首相になるかと思うんですけども、この安倍総裁に対しての知事の持っていていらっしゃるイメージというか期待することというのは。

(知 事)

私も全国市長会の会長のときに何回もあの方が幹事長だったり副幹事長だったり、総理のときもお会いしていますけれども、やはり純粋な、伝統的な保守の考えの方であります。私はそれはそれでいいと思います。ただ、現実にはやはり自民党政権が誕生する前から、株も上がって円がね安くなったという、やはり市場は歓迎なんですね。ですからやはり、とにかくですね、今のところ、まあ憲法もいいでしょう、国防もいいでしょう、それはそれでいいんですけども、考え方は、それでやればいいんですけども、まず、まず景気、雇用、これに全力を尽くしていただきたいと思います。

そういうもので、やはり日本の経済が安定して、国民がですね、やはり一定の生活の安定のもとに初めて次の段階のことを冷静に判断ができるという、そういう状況になると思いますので、やはりいろいろな憲法にしても何にしても、これは、これ議論ですから、大いにですね、何が駄目だという話じゃない。ただ、やはり国民が冷静な形で落ち着いて判断できる状況をつくって、そういう国の大きな形の問題をね、提起するのが私はいいいんじゃないかと、そういうことで、まずは景気問題、これにですね、全力で突っ込んでいただきたいと思います。

まあそれは柔軟性はある方です。そういう意味の、十分この3年半の間の、さらに前回の様々な形での反省は踏まえている方だと思いますので、期待をいたしております。

---

(記 者)

国防軍というのに関してはどういうふうにご考えていらっしゃいますか。

---

(知 事)

これもね、名前だけでは意味がないんであって、私は自衛力をきっちりするというそういう前提で、私はどちらかというと名前よりも物理的にちゃんとした抑止力を持つと、これは本会議でも話しておりますので、まあ名前というのはやはり憲法上のいわゆる脱皮です、これはですね、やっぱり十分国民的議論の中でやはり決めるべきことであります。

---

(幹事社)

ほか、質問ありますでしょうか。なければすみません、最後に1問だけお願いしたいんですけども、本日、一票の格差を問題視した弁護士のグループが全国で裁判所に提訴する予定と聞いておまして、秋田でも仙台高裁秋田支部に提訴するという話を聞いておまして、この問題、一票の格差是正するとなると、やっぱり秋田の、秋田選出の議員がどうしても減ってしまうという問題があると思うんですけども、一票の格差の問題についての知事の認識というか、どのように考えていらっしゃるか。

---

(知 事)

基本的には一票の格差というものは、これは非常にね、本当はその格差が少ないにこしたことはないんですけども、現実の政治行政の枠組みからしますとですね、この問題非常に難しい問題です。

私はですね、一票の格差を完全に是正するなんていうことはですね、私はそれそのもの

が間違った考えだと思います、個人的には。なぜかというとな、これもしね、一票の格差というものを完全になくすとですね、やはり政治行政の対象というものがね、人だけじゃないんですよ。自然だとか様々な、今これからの様々なね、そういうものに、人、個人個人だけじゃないですから、これをね、杓子定規にやる方が、いわゆる科学的ではない。ただ、海外でね、一票の格差をいかに少なくするなんていうことはね、実は地方分権がかなり進むとですね、これは可能なんです。やはり地方分権が進むと、その地域は、その地域の議員、あるいは首長の判断でいろいろできると。やはり今は地方分権がですね、必ず（しも）その、そういう完全な地方分権状態になってない、こういうことですから、やはりどうしても国会議員の数というものが地域の様々な行政に、政治行政というかね、住民生活にも関係してくるわけですよ。

これが完全にですね、国防だとか司法だとかですね、やはり国全体の問題を中心とするのが国会議員だとすると、ここはね、そんなに違いませんか、私は秋田から少なくなったとしても、これはこれで私はできると思うんですけども、今はですね、そのかなりのものが国で決まりますので、これはそうするとですね、人口格差だけでいったんじゃあ、もう日本国が成り立たないという、ですからね、みんな単純なんです。最近の議論ってね、深みがないんですね。そういう背景だとか、諸外国の状況、そういうものをきちっと踏まえた形で物を言わないと、私は非常に日本人がですね、ものの考え方が浅くなっているということが、私はですから地方分権を進ませることによって、むしろそこがあれば我々も納得します。

---

(幹事社)

ありがとうございました。

---

(記者)

地方分権の話が出たので、1個だけ、自民党の公約の中で道州制の基本法の早期成立を図るということで5年以内の導入を目指すということなんですけども、この道州制について、この進めるという方針についてはどのように・・・。

---

(知事)

これまでもですね、もう10年来ずっとやってきてます。まあ私も全国市長会の当時は基本的には道州制について、将来的な方向性は正しいということではありますが、やはり自民党の当時道州制の自民党の中の調査会に呼ばれて行ったことありますけども、みんな考え違うんですね。ですからやはりそういう意味では、今の一票の格差の話もありましたけども、本格的にね、むしろ道州制が先にあるんじゃないかと、好ましい形での地方分権、これがどういう形がいいのかと、その中で道州制なのか、もう少しくりの緩やかな都道府県連合なのか、そういうふうに決めていく方がいいと思います。がっちり道州制を先に置いておくそうですね、形よりも実質のところの地方分権をどうするか議論がないと、市町村合併とは全然道州制違いますから、ですから、そこがですね、自民党としてはどう取り組むのか注目しております。

(記者)

すいません、ありがとうございました。